インフィニット・ストラトス　～とある衛士のおとぎばなし～

軟らかい装甲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
インフィニット・ストラトス　～とある衛士のおとぎばなし～

【Ｎコード】
Ｎ４１３３Ｓ

【作者名】
軟らかい装甲

【あらすじ】
『マブラヴ　オルタネイティヴ』の世界で戦死した帝国軍衛士が、次に目覚めたのは元の世界とは全く異なる『ＩＳ』の世界だった。異邦人となった彼はこの世界で、何を感じ、何を想い、何を信じ、何のために戦って行くのか。そして、彼は元の世界へと帰還する事が出来るのか。

プロローグ　『甲十六号作戦』（前書き）

オリ主＋オリヒロインは強めに設定しています。

二番煎じではありますが、それでも読んで頂ければ幸いです。

作者の執筆速度は遅いので、更新が停滞する事もあります。

プロローグ　『甲十六号作戦』

「・・・・・限界か」

網膜には脱出勧告と強化外骨格の起動ウインドが表示されている。
青年は喉の奥から迫り上げてきた物を吐き出した。真っ赤な血が飛び散り、自身を。コクピットを濡らしていく。

『脱出しろ！大丈夫だ。まだ間に合う！』
『そうだ！こんな所で諦めるなんてあんたらしく無い！！』

何年も苦楽を共にした、戦友の声が微かに聞こえる。

『はじめぇ・・・・・・。駄目、駄目だよぉ・・・・・・』

そして最愛の人の声が、命を捨ててでも護りたいと想った人の声が聞こえる。
コンソールアームを握り締めていた力が、どんどん抜けて行く。
コクピットの中には装甲を食い破り、自分を喰らおうとする異性起源種――ＢＥＴＡの咀嚼音が響いていた。

「このまま・・・・・・で済ます・・・・・・かよ」

唇に付いた血を掌で拭い去ると、両手に力を込めた。
大人しく食われるつもりは無い。
ならば愛すべき国土を汚した、護るべき人々を奪ったＢＥＴＡに一矢報いてみせる。

「司・・・・・・・みんなを連れて・・・・・・・退避しろ」

幼馴染の親友に、掠れるような声で告げる。

『お前・・・・・・。まさか！止めろ、・・・・・・・止めろ一！ようやくここまで来たんじゃねぇか！

佐渡島取り戻して、甲二十号も落として！俺たちはこれからだろ！』

「もう・・・これしか無い！」

表示されていた全てのダイアログを閉じると、強化ガラスに覆われた自決用爆弾『Ｓ－１１』の起爆ボタンを、ガラスを叩き割りながら押した。網膜に３０秒のカウントタイマーが表示される。

「あと３０秒。幸い・・・・・・・光線属種は見られない。全力噴射なら爆破範囲から余裕で逃げられる」

『馬鹿野郎っ！この大馬鹿野郎！！！』

親友の罵声を聞きながら、青年はシートに身体を預けた。

「司、葵。最後に一つ頼んでいいか？」

『何だ・・・・・・・！』

『何よ・・・・・・・！』

「雪乃の事頼むわ・・・・・・」

『・・・・・・ああ。任せろ』

『当たり前よ。あたしの親友なんだからっ！』

顔を歪めながら親友達は、青年の頼みを承諾してくれた。

「悪ぃ。最後の最後まで迷惑かけてよぉ・・・・・・」

謝罪の言葉を述べると、青年は通信をオープン回線から秘匿回線に切り替える。

「・・・・・・雪乃・・・・・・・・ごめん」

『・・・・・・・っ・・・・・・・』

涙を零しながら、青年の恋人――雪乃は青年を見つめた。

「今までありがとな。お前がいたから・・・・・・俺はここまで戦えた」

『それは・・・・・・私・・・・・・・だ・・・・・・・って・・・・・・』

嗚咽で言葉を詰まらせながら、言葉を噤んでいく。

そんな泣き顔は見たくなかった。だが彼女を泣かせているのは自分だ。そう思うと一は己の無力さに、堪え切れないほどの憤りを感じた。

「俺の分まで幸せにな」

『うん・・・・・・』

「俺の分まで長生きしてくれよな」

『うん・・・・・・・うん・・・・・・・・・』

話しているうちに、青年の頬にも熱い何かが流れていた。

「じゃあな・・・・・・・元気で・・・・な」

『はじめ・・・・・・・いや、やっぱりいやだよぉ！ここでお別れなんて、もう二度と会えないなんて・・・・・・。そんなの絶対にい

やだよ！』
「行くんだ！・・・・・・生きろ、何があっても！そして・・・・・・
語り継いでくれ」

それこそが衛士の流儀。
人類の未来にその命を捧げた英霊への弔い。

『はじめぇぇぇぇぇぇ！！！！！』

口から血が溢れ出るが、青年は気に留めず言葉を紡いでいく。

「俺の・・・・・・名前を・・・・・・。俺たちが生きていた証を・・・」

走馬灯のように、生まれてから今までの記憶が蘇る。

「護りたかったなぁ……もっと生きて、護りたかった」

青年の呟きと共に、カウントがゼロを表示する。
目も眩むような閃光と共に、戦術核に匹敵する爆発が巻き起こる。
その瞬間、青年の駆る０４式戦術歩行戦闘機―不知火・二型はその地上から姿を消した。

２００４年１２月２５日
国連軍、大東亜連合軍、統一中華戦線、日本帝国軍によって決行された重慶ハイヴ攻略作戦『甲１６号作戦』は多大な犠牲を払いつつも、突入したハイヴ攻略部隊の手により反応炉が破壊され、人類側の勝利に終わった。

登場人物（前書き）

本編への登場に伴い、順次追加していく予定です。

登場人物

黒羽一

日本帝国陸軍・呉基地所属。階級は大尉。愛機は０４式。ポジションは突撃前衛。

呉基地では『ブラック・ウィング』中隊の中隊長を務めた。

『一二・五事件』、『甲二十一号作戦』、『横浜基地防衛戦』、『甲二十号作戦』などの激戦を生き残り、０４式の開発部隊にも所属していた凄腕の衛士。

『甲１６号作戦』において機体が大破。Ｓ－１１にて爆死。

したかに思えたが、目覚めると『ＩＳ』の世界に転移してきていた。

身体能力や知識などは、殆ど引き継がれている模様。

零章　『目覚め』（前書き）

『ＩＳ』本編に行くまでに、結構時間掛かりそうです。

零章　『目覚め』

「・・・・・・っ」

黒羽一は、突然射した日差しに思わず目を開けた。大きく欠伸をすると、ガリガリと頭を掻いた。

「・・・・・・眠い」

襲ってきた眠気に、一は再びベッドに倒れこんだ。

（にしても・・・・・・柔らかい布団だな・・・。基地の布団は固いので有名だったのに）

呉基地の布団は固い。札幌基地の珈琲は味が濃い。大阪基地は味が薄い。

帝国軍主要基地の設備に対する不満をあげたものだ。

『甲二十号』の陥落で、徐々に情勢は好転しつつはあるが、帝国内の物資はまだ不足しており、基地の設備がきちんとしているとこは無いのが現状だった。

（・・・・・・・・・・・・えっ？）

一は自身の置かれている状況に違和感を覚え、飛び起きた。一の部屋があるのは、基地の地下３階だ。日の光が射す事は、ありえないのだ。

「どこだ？・・・・・・・どこだよ。ここは・・・・・・・！」

一の目の前に広がっていたのは、最低限の家具しか置かれていなかった殺風景な部屋ではなかった。
綺麗な壁紙に、暖かそうな絨毯。見た事もない機械に、美麗な印刷がなされた本の数々。それは今まで一が見た事もないような光景だった。

「俺は・・・・・・死んだじゃ・・・・ないのか・・・・・・・！」

自分は間違いなく、数分前『甲十六号作戦』で命を落とした筈だ。
恋人に、親友に、戦友に別れを告げて『Ｓ－１１』で自爆した筈だ。
それなのに何故、自分は見知らぬ部屋で寝ているのだ。

「何だこれ・・・・・・。・・・・・・・っ！！！」

頭部に今までに感じた事の無い痛みが襲った。

（記憶？・・・・俺はこんな記憶知らない・・・・・・！）

痛みを伴いながら、脳に自分の知らない記憶が流れ込んでくる。

一の知っている記憶。
父の居なかった幼少期。世界の実情を知り、訓練校で衛士となるべく己を鍛え、衛士として戦い続けた青年期。そして、『甲十六号作戦』で自爆した。

一の知らない記憶。
父の居た幼少期。世界の実情も理解しようとせず、ただ怠惰に過ごしている青年期。

「何なんだよ、この嫌な感じは・・・・・・」

一の記憶の中では、２２歳で『甲十六号作戦』で戦死したのが最後の記憶だ。だが、一の知らない記憶は、１５歳で記憶の続きが無い。

「気持ち悪ぃ」

頭痛は止んだものの、頭がぐわんぐわんとして吐き気がする。

「ここは・・・・・俺の部屋・・・何だよな」

もう一つの記憶と照合してみると、この部屋はどうやら『黒羽一』の自室と言う事で間違いないようだった。

痛む頭を抱えながら、自身が置かれた状況について考えている。

（くそっ、落ち着け！衛士たるもの常に冷静であれ。だろう）

あたりを見回すと、教科書とプリントが積まれた机が目に付いた。

（とにかく・・・・・状況を整理するか）

ベッドから身体を起こすと、机のそばに置かれていた椅子に腰掛ける。そして、適当に置かれていたノートとボールペンを手に取った。

（俺の名前は黒羽一、１９８１年４月１８日生まれ。郡山衛士訓練学校卒業。日本帝国陸軍呉基地所属、第３１８中隊の中隊長。階級は大尉、ポジションは突撃前衛）

自分の所属部隊などを、ノートに書き込んでいると、先程の頭痛が再び襲ってきた。

（また俺の知らない記憶だ……いや、俺は知ってる？）

先程書いた文章の上に、『ＢＥＴＡの居た世界』と乱雑に書き込むと、ノートを捲った。次は『俺の知らない？記憶』と書き込み、頭に浮んできた情報を書き込み始めた。

（名前は変わらない。生年月日は１９９３年４月１８日。地元の中学校の３年生。進路は地元の進学校を予定。既に試験を終え、結果待ち）

一通り情報を書き終えると、一は持っていたボールペンを放り投げた。

「どうなってんだ、この状況は！」

ガリガリと頭を掻きながら、一は叫んだ。

自分は一体どうなっている？何故、情報の違う二つの記憶を持っている？

崩れるように椅子に身体を預けながら、一は天井を眺めた。

そうする事、数十分。ようやく一は椅子から落ちかねないほど、ずり落ちていた体勢を直した。

「悩んでも変わらないか……」

心底疲れたと言った声色で呟くと、今度はベッドの上に身を投げた。

先程の頭痛がまだ退かず、吐き気を増し始めたのだ。思考がまとまらず、頭が重い。

（とにかく俺は元々持っていた記憶とは、別にもう一つの記憶を持ってるのは確かだ）

そうでなければ、ああも鮮明に記憶が思い出せるはずが無い。違うならば、それはきっと自分の頭がおかしくなった。と言う事だろう。一としては、まともな思考で考えが出来ている以上、後者は選択肢に入れたくは無かったのだが。

（そんで、ここは元々俺が居た世界じゃないってのも確かだ……）

これは殆ど直感であったが、一は9割方当たっているだろうと思った。

その根拠の一つは、元々いた世界で見た事が無い物が存在する事。二つ目は、空気だ。空気といっても清んでいると汚れているとかではなく、感覚だ。もといた世界が持っていた空気は、ぴりぴりとした常に気が張るような感覚だが、今いる世界はなんと言うか穏やかな、悪く言ってしまえば微温湯に浸かっている。そんな感覚だった。

「事実は小説よりも奇なり。か……」

一は生まれて始めて、このことわざの事を使った。

「寝るか」

寝るだけで元の世界に戻れるとは当然の事ながら思ってはいない。だが、それでも一は古典的な『夢オチ』という物に賭けて見たくなったのだった。

自分が居るべき世界はここではないのだから。

別の世界で生活する。そんな夢物語の様な出来事は必要ないのだ。

たとえどんな過酷な現実であろうと、そこで生活する人々がいる。

それを護るのが自分の役割なのだから、一刻も早く元いた世界に戻らなければならない。

次に目に入る光景が、見に覚えのある天上である事を願って、一は目を閉じた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4133s/

インフィニット・ストラトス　～とある衛士のおとぎばなし～

2011年10月8日23時25分発行